

「欧州の現状と今後の日欧・日露関係」

味の素株式会社取締役
元駐フランス、駐ロシア特命全権大使
齋藤 泰雄 氏

7月24日(金)12時から、東海大学校友会館において第445回月例会を開催した。当日は、味の素株式会社取締役、元駐フランス、駐ロシア特命全権大使の齋藤泰雄氏より「欧州の現状と今後の日欧・日露関係」と題する講演が行われた。出席者は70社75名であった。講演要旨は次のとおり。

「近年、欧州では、日本文化をはじめとして日本への関心が国民レベルで非常に高まっている。一方で、国レベルにおいては、今後も政財界が一体となって一層存在感を高めていくことが必要だ。

欧州は言語や歴史的背景などにより、世界各地との結節点としての役割を果たしているとともに、発信力のあるメディアやシンクタンクを多く有している。また世論喚起力、G7等の主要な国際的枠組みにおける規範形成力の高さ、経済的規模の大きさなどが主な力の源泉となり、世界にとって、そして日本にとって重要な地域となっている。

更に、民主主義や基本的人権の尊重、経済活動の自由といった面において、日本とも基本的価値と原則を共有している。そうしたことも踏まえつつ、私がフランス大使として在任していた際、中国への武器輸出禁輸問題やロシアへのミストラルの売却問題等に関して、欧州の理解を得られるよう努めた。

ひるがえって今日の欧州を見ると様々な課題を抱えている。その一つが、ギリシャ危機である。2009年の債務危機発覚以降、ポルトガルやアイルランド、スペインといった国々への影響が懸念されてきたが、今後もそうした国々への影響を防いでいけるかが重要だ。そこで注目されるのがドイツの動向だ。『ドイツのための欧州』ではなく、『欧州のためのドイツ』として役割を果たしていけるかが大きなポイントであり、ドイツの動向を大きく左右する、かつて『メルコジ』と呼ばれた独仏関係の重要性も高まっている。

二つ目の課題がウクライナである。ウクライナは地政学的に、欧州だけでなくロシアにとっても重要



齋藤 泰雄 氏

な地域である。そのため、ロシアはウクライナに対する影響力を残しておきたいと考えており、必ずしも一枚岩となっていないウクライナ国内の隙を突いて、ウクライナの分断を画策するとともに、さらには、ウクライナ問題を契機に欧州分断を狙うような動きも見せている。

その他にも、移民や治安、失業などの社会問題も課題となっており、こうした情勢を背景として、欧州各国においてEU懐疑派政党が躍進している。特にフランスでは極右政党が躍進しており、EUの今後を占う上で目が離せない。

ロシアに関しては、広大な国土かつ複雑な民族構成を抱える国を治めるためには、ある種の強権的政策が必要であるのかもしれない。ロシアには強権がある程度甘受する辛抱強い国民性がDNAとして流れているのかもしれない。そうした影響もあってか、真の意味での民主化はなかなか進んでいないように感じている。

欧露関係については、ロシアは歴史的にも欧州と非常に強い結びつきがある。近年では天然ガスを通じて、ロシアと欧州は密接な関係が続いてきたが、最近ではお互いに依存するリスクを避ける傾向もあり、ロシアは日本や中国などの東方との繋がりを強める『東方政策』にシフトしつつある。

日露関係については、経済的な繋がりが深まっているが、唯一課題となっているのが平和条約交渉である。北方領土問題の解決に向けて、首脳レベルでの交渉による解決を期待したい。」

(文責・事務局)